

(別紙様式 1)

平成22年度学融合推進センター戦略的研究プロジェクト成果報告書

研究テーマ名称	生命科学の発展がもたらす社会的課題とその対応策の基盤構築
応募事業区分	戦略的研究プロジェクト
申請代表者氏名	長谷川真理子

○ 研究状況報告

2010年12月10日に、第1回準備会合を行い、13名の研究参加予定者によって、本研究の目的・研究法・研究対象の絞り込み・成果発表の形式などについて討議を行った。ただし3月14日に予定していた、第2回準備会合は、東北関東大地震の影響により中止した。

研究メンバーの小門稔氏が、2010年12月にフランスに調査に赴き、ヒト保護委員会の関係者、パリ控訴院の判事などにインタビューを行い、国家生命倫理委員会図書室など関係機関を訪問して、資料収集を行った。

研究メンバーが、日本の生命倫理政策に関係する研究者や行政担当書に対して、ヒアリングを行い、本研究の研究対象や研究方法に関して意見交換を行い、情報を収集した。

○ 当該事業年度において達成された研究成果

現在の日本における生命科学の研究が直接・間接に直面している生命倫理的な課題に関して、問題の具体像を明確にすることが重要であり、これを本研究の主目的とすることで合意が得られた。本研究としては、実験系と人文系の研究者が、実際に直面する生命倫理的課題の基盤を明確化することを通して、異分野の研究者の間に実質的な対話が成立すること、同時にこれが社会に対して透明性を高める、という共通認識に立っている。これを具体化するための、方法・課題・成果のまとめ方、などに関しては、全研究参加者の間で、早急に詰める予定である。

研究課題としては、ヒトを対象とした研究管理についてとりあげ、わが国における倫理委員会の実情について把握するため、さまざまな機関の倫理規定の比較、審査の実際とさまざまな学会のルール・諸規則などとの整合性などについて、研究することとした。さらに、研究の必要性の高いものとして、パーソナル・ゲノミクス、脳科学、マン・マシン・インターフェイスなどの課題があり、これらに関する基本資料について分析を開始した。

ヒトを対象とした研究管理は、倫理委員会に関する政策に直結するものであり、この問題に関しては、欧州社会が安定した政策運用に移行しているとみられ、現時点で改めて横断的な分析が有益である。この問題でフランスの現状の分析に着手した。

将来、本研究の成果が、生命科学の研究者がさまざまな判断が必要となった場合に、一つの参考情報なるために、ホームページを作成することを視野に入れている。

○ 本研究を基に発表した論文と掲載された雑誌名等のリスト（論文があれば添付）